

## 漢語動名詞の意味推測において漢字の意味情報と文脈情報はどのように関連づけられるか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福井大学国際センター・語学センター 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): 漢語動名詞, 意味推測, 文脈情報, 主要部, 非漢字系上級学習者 キーワード (En): Sino-Japanese verbal nouns, inference of meaning, information from context, non-kanji background advanced-level learner 作成者: 桑原, 陽子, Kuwabara, Yoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/0002000195">http://hdl.handle.net/10098/0002000195</a>

## 漢語動名詞の意味推測において漢字の意味情報と文脈情報はどのように関連づけられるか

桑原 陽子

### 要 旨

本研究では、非漢字系上級日本語学習者を対象に、漢語動名詞の意味推測の調査を行なった。調査では、漢語動名詞が文中で示された場合とそうでない場合とで意味推測の内容にどのような違いが生じるかを観察した。調査の結果、漢語動名詞が文中で示された場合は、そうでない場合よりも意味推測が成功しやすくなることが示された。具体的には、漢語動名詞を構成する漢字が複数の意味を持つ場合に、文脈情報が追加されることによって適切な意味が選択されて正しい意味推測が可能になることから、漢語動名詞の意味推測の成功には、文脈と関連づけられる漢字の意味を想起できることが必要であることが示された。また、漢語動名詞の主要部の意味が適切に判断できていることは、漢語動名詞の意味推測の成功の決め手にはならないことが示された。さらに、主要部の意味が適切に解釈された場合、漢語動名詞の語構成のタイプによって、意味推測成功の度合いが異なる可能性が示唆された。

キーワード：漢語動名詞、意味推測、文脈情報、主要部、非漢字系上級学習者

### 1. はじめに

筆者は非漢字系中上級日本語学習者を対象に、漢字2字熟語の意味をどのように推測するかについて、インタビュー調査を行ってきた(桑原, 2012; 2014; 2023)。それらは、意味推測の過程で、漢字熟語を構成する個々の漢字の意味情報、語構成の情報、漢字熟語を含む文の統語情報、文脈情報などをどのように利用しているかについて、詳細に記述したものである。その中で桑原(2023)では、ドイツ語を母語とする学習者を対象に、漢字2字熟語に「する」がつくかどうかを判断させた後で、その意味をどのように推測したかについてインタビューを行った。その結果から、漢字2字熟語の品詞と中心的な意味を決めるのは左右のどちらの漢字かについて、学習者は自分なりの考えを持っていること、右の漢字が中心的な意味を決めると考える傾向があることを示した。

小林(2004)は、このような「①語全体の品詞を決め②語の意味の中心をなす要素」(p.114)を「主要部」として、「洗車」と「愛車」を例にして(ア)のように説明している。

(ア) 「洗」が主要部である「洗車」は、「～する」という形で使えるが、「車」が主要部である「愛車」は、「～する」が使えない」(p.114)。

漢字2字熟語の主要部は一律に決まっているわけではなく、原則は右側が主要部だが、「洗車」のように左側主要部も存在する。たとえば桑原(2023)では、「返品」について「返した商品」なのか「品

物を返す」なのかの判断に迷う学習者の様子が観察されているが、これは左の「返」が主要部なのか右の「品」が主要部なのかの判断に迷っていると言い換えられる。学習者は「主要部」という用語は知らないものの、意味推測の過程では左右どちらの漢字が意味の中心かを考え、それによって熟語の意味を解釈しようとする。したがって、どちらの漢字が主要部かを判断することは、漢字熟語の意味推測そのものであると言える。

桑原 (2023) では、漢字熟語を単独で学習者に提示して意味推測を行わせたために、「する」がつくかどうかの正答率は50%程度と高くなく、意味推測の内容も正しいものは多くなかった。しかし、漢字熟語が文中で示されれば、漢字熟語単独の場合よりも正しい意味推測が可能になることが予想される。漢字熟語を構成する個々の漢字の意味に加えて、文脈情報を利用できるからである。このことについては、Mori & Nagy (1999) が漢字熟語を構成する漢字の意味だけを利用して漢字熟語の意味を推測した場合と、文脈情報もいっしょに利用した場合とを比較し、漢字の意味と文脈情報の両方を利用して意味推測を行った場合のほうが、漢字熟語の意味を正しく推測できることを明らかにしている。

では、文脈情報が利用できる状況では、漢字熟語を構成する個々の漢字の意味はどのように利用されるのだろうか。文脈情報を利用して正しい意味推測ができた場合、熟語を構成する漢字、特に熟語の中心的な意味を担う主要部の漢字の意味も正しく解釈できていることが予想される。その一方で、漢字の意味が正しく解釈できていなくても、文脈情報を利用すれば漢字熟語の意味が正しく推測できることもあるだろう。

本研究の目的は、漢字熟語が文中で示された場合に、熟語の意味がどのように推測されているかについて、記述・分析を行うことである。文脈情報と漢字の意味、特に漢字熟語の主要部の漢字の意味をどのように利用して推測が行われているかを探る。

本研究は、桑原 (2012; 2014) の漢字熟語の意味推測に関する3つの調査で得られたデータを分析対象としており、桑原 (2014) に後続するものである。

## 2. 調査

### 2-1. 調査方法

調査方法は桑原 (2012; 2014) と同様である。調査対象者全員に対して、1名ずつ調査1から調査3までを順番に行った。調査対象の漢字熟語は調査1から調査3まで同じものを使用しており、調査1では漢字熟語だけを見てその意味を推測し、調査2では漢字熟語の品詞が特定できる情報が追加される。調査3ではさらに文脈情報が追加される。このように、この3つの調査は、漢字熟語の意味推測に利用できる情報を少しずつ増やしていく過程で、どの情報をどのように活用して、正しい意味推測に辿り着くのかを観察しようとしたものである。具体的な調査方法は次のとおりである。

#### [調査1]

調査対象の漢字熟語だけ (例: 調達) が記載された調査用紙1を使用した。

- 1) 調査協力者は、調査用紙1の漢字熟語の読み方をひらがなで書いて、その意味を推測した。回答は日本語か英語とした。

漢語動名詞の意味推測において漢字の意味情報と文脈情報はどのように関連づけられるか

2) 1) で回答した漢字熟語の意味の正しさにどのくらい自信があるかについて、それぞれ5段階で評定した。

3) 1) と2) の回答について、調査者が日本語でインタビューを行った。特に、漢字熟語の意味について、なぜそのように考えたのかを詳しく尋ねた。

[調査2]

調査用紙1と同じ漢字熟語を使って、調査用紙2を作成した。調査用紙2では、漢字熟語それぞれについて、品詞が特定できる最低限の情報を追加した(例: 調達する)。この調査用紙2を使って、調査1と同様に1) から3) の順で調査を行なった。

[調査3]

調査用紙3では、調査用紙2にさらに文脈情報を増やした(例: 留学のための資金を調達した)。調査用紙3を使って、調査1、調査2と同様に調査を行った。

調査1から調査3までのインタビューの会話は、調査協力者の承諾を得た上で、すべてICレコーダーで録音した。

桑原(2014)では、調査1と調査2のデータの中から32語の漢語動名詞を分析対象として、漢語動名詞だけを見た時に推測された意味が、それに「する」がつくことがわかったときにどのように変化するかを観察している。

本研究では、その漢語動名詞32語のうち(イ)の31語<sup>1)</sup>について、調査3の結果を中心に分析を行う。

(イ) 下見、助長、音読、他界、点火、軽減、死別、転売、確約、白状、空爆、  
両立、注力、流用、服用、成約、着手、断念、調達、死守、他言、自立、  
病欠、運休、密集、密売、散財、分乗、白熱、物色、熱中

調査3では「留学のための資金を調達した」のように漢語動名詞「調達」を文中で示し、その意味を英語か日本語で書いて回答させている。その後、その回答について、どうしてそのように推測したのかを詳しくインタビューし、回答が調査2と異なった場合は、その理由も詳しく聞いた。このように「調達する」だけを学習者に提示した場合と、「留学のための資金を調達した」の場合とで、学習者が推測する「調達」の意味がどのよう変わるかを観察すれば、「留学のための資金を」という文脈情報がどのように推測内容に影響しているかを明確にすることができると思われる。

本研究の分析対象は、(イ)の漢語動名詞31語の意味を推測した学習者の筆記による回答と、それについてのインタビューの会話データである。

## 2-2. 調査協力者と調査時期

桑原(2014)と同一の非漢字系上級日本語学習者6名である。6名全員が、調査時に日本国内のF大学上級日本語クラスに在籍していた。日本語学習開始以前に漢字の知識を持っていた学習者はいなかった。学習者の日本語学習歴等について表1に示す。

表1 調査協力者の日本語学習歴 (調査時)

	日本語学習歴	日本語能力試験	既知漢字数*	調査参加時期
学習者A	3年	2級合格	1000字以上	2012年11月～12月
学習者B	5年6ヶ月	2級合格	1000字以上	2012年11月～12月
学習者C	2年6ヶ月	2級合格	1000字以上	2012年11月～12月
学習者D	4年6ヶ月	未受験	1000字以上	2014年8月
学習者E	3年4ヶ月	未受験	1000字以上	2014年8月
学習者F	3年7ヶ月	1級合格	1000字以上	2014年8月

\*既知漢字数は自己申告による

### 3. 結果

分析対象の31語の中で7語に未回答があり、学習者6名全員が回答したのは24語であった。また、全員が回答した24語のうち、未習の漢字があった事例は「空爆」「病欠」「散財」それぞれ1つずつであった。また、漢字を誤読した事例が2つあった。それらの漢語動名詞とその事例数を(ウ)に示す。( )内の数字が未回答、未習、誤読のあった事例数である。

(ウ) 物色 (3) 熱中 (3) 散財 (2) 分乗 (1) 密集 (1) 密売 (1) 白熱 (1)  
病欠 (1) 空爆 (1) 運休 (1) 白状 (1)

漢語動名詞の意味が正しく推測されているかどうかは、学習者が調査用紙に書いた答えだけでなく、その後のインタビューで話した内容も加味して判断した。漢語動名詞と漢字の意味については、複数の国語辞典・漢語辞典を参照した(参考資料)。

(ウ)の11語を除いた20語について、意味を正しく推測した学習者1名につき1点として、漢語動名詞1語ごとに正答数を算出した。調査2と調査3の正答数平均を算出したところ、調査2が1.20で、調査3は2.30であった。また、31語全体の186事例から(ウ)の16の事例を除外した170例のうち、調査2で正答した事例は33例であるのに対して、調査3で正答した事例は76例であった。なお、調査2で正しかった推測が調査3で誤った推測に修正された事例はなかった。正答数平均および正答した事例数の両方の結果から、文脈情報が追加された調査3では、調査2と比べて正しい意味推測が行われていることがわかる。

そこで、(ウ)の16の事例を除外した170例の中で、調査2で意味推測に成功しなかった事例137例を対象に、調査3の意味推測の内容について分析を行う。3-1. では調査3で意味推測が成功した事例76例について、3-2. では意味推測が成功しなかった事例60例について述べる<sup>2)</sup>。なお、この後本文中で示す事例数には、未回答および未習の漢字、誤読した漢字があったものは含まれていない。

#### 3-1. 意味推測に成功した事例

調査3で意味推測が成功した漢語動名詞の中で、正答数が多いものから以下に示す。( )内の数字は調査2で意味推測が成功しなかった学習者数である。たとえば、「調達」は調査2で6名全員が意味推測に成功しておらず、そのうち3名が調査3で意味推測に成功している。

正答数6：両立 (6)

正答数5：分乗（5） 運休（5）

正答数4：他界（5） 助長（5） 空爆（4） 密集（4） 点火（4）

正答数3：調達（6） 確約（6） 注力（5） 他言（4） 死守（5） 散財（4） 白熱（5）

正答数2：音読（2） 白状（4） 服用（5） 自立（2） 下見（6） 死別（6） 病欠（3）  
熱中（2）

正答数1：成約（3） 断念（5） 軽減（5）

これら26の漢語動名詞の76の事例について、漢字の意味がどのように意味推測に利用されているかを見ると、左右両方の漢字の意味を正しく解釈して利用している事例、どちらか一方の漢字の意味だけを正しく解釈して利用している事例、どちらの漢字の意味も利用せず文脈だけを手がかりにしている事例の3つに分けられる。両方の漢字の意味を利用しているものが最も多く51例、一方の漢字の意味を利用しているものが21例、文脈だけを利用しているものが4例であった。それぞれについて調査2の結果も併せて具体的に示す。

### 3-1-1. 両方の漢字の意味を利用している事例

両方の漢字の意味を組み合わせた事例の代表として、「分乗」を取り上げる。学習者ごとの回答を表2に示す。（ ）内はインタビューの内容を要約したものである。「×」は推測ができなかったことを示す。

調査2では、「乗」の解釈が「乗る」「乗せる」「乗法」のように一致しておらず、「分」は学習者D以外うまく解釈できていない。結果、5名中2名は「分乗」の意味を推測することができず、何らかの回答ができた場合であっても、「部分を乗る」（学習者B）のような無理のある回答が見られる。

しかし、調査3では、5名全員が「分」「乗」の両方の意味を利用して正しい意味推測を行っており、「タクシー」と「(人が)乗る」、「2台」と「分かれる／分ける」が適切に関連づけられている。

表2 「分乗」の回答（調査3提示文「タクシー2台に分乗する」）

	学習者A	学習者B	学習者D	学習者E	学習者F
調査2	乗り換える？	部分を乗る。 (意味不明)	分けてから荷物を車に乗せる。	×	× (「乗」は「乗る」「乗法」どちらの意味か。)
調査3	人がグループに分けて乗る。	分かれて乗る。	調査2と同じ。 (ただし、分かれて人が車に乗る。荷物ではなく人)	人が多いので分けて別の車に乗ること。	分けて乗る。

次の事例は「密集」である。調査3で正しく推測できた4名のうち3名が両方の漢字を利用して推測を行っている。表3にその3名の回答を示す。

表3 「密集」の回答 (調査3 提示文「このあたりは家が密集している」)

	学習者A	学習者B	学習者D
調査2	非常に集まること・非常に集めること。	密かな集まり・集会。	秘密で集めること。
調査3	物と物の間が狭い。	密度が高い。	crowded (家が多くてみっちりしている。)

調査2では「集」の解釈が「集まる」「集める」に分かれる。「密」に対しては、学習者B、学習者Dが「秘密」を挙げているが、調査3ではそれが「密度」に変わっている。これは、「集」が提示文中の「家」と関連づけられ「家が集まっている」と文の意味が推測されたことにより、それに合わせて「密」の解釈を変えたものである。

「分乗」「密集」の事例に共通しているのは、調査2では漢語動名詞を構成する漢字の意味にいくつかの候補があり、調査3の文脈情報をもとにそれが1つに絞られていることである。調査2では、動詞的な意味を示す「乗」「集」について「乗る／乗せる」「集まる／集める」のどちらで解釈すべきかに揺れがあるが、調査3では「乗る」「集まる」が選択されている。また、「密」についても調査2では「秘密」が仲介する「密かに。かくして人に知らせない」という意味と「密度」が仲介する「隙間がない」という意味の2つが見られるが、調査3では「隙間がない」が選択されている。

このような事例は多く、たとえば次のようなものがある。

(1) 「確約」：調査3 提示文「彼は明日までに返すと確約した。」

調査2では「約」が「およそ」と解釈されたが、調査3では「約束」に変更され、「確か+約束」と解釈された。提示文の「明日までに返す」が影響している。

(2) 「散財」：調査3 提示文「東京へ行って散財する。」

調査2では「散」について「投資する」「施す」「分ける」のようにお金(財)の使い方に関する様々な推測が見られたが、調査3では「(お金を)たくさん使う」に変更された。提示文の「東京へ行って」が影響している。

(3) 「他言」：調査3 提示文「このことは他言しないでください。」

調査2では「言」については「言う」「話」、「他」については「他の人」「関係ない(他の)こと」といった複数の解釈があり、「他言する」に対して「他の人が言ったことを伝える」「関係ない話をする」といった解釈が見られた。しかし、調査3では「他の人に言う」に変更された。これは、「他言する」の目的語「このことは」が追加されたことと、「しないでください」という禁止の表現が影響している。

(4) 「死守」：調査3 提示文「財産を死守しようとする。」

調査2では「死」と「守」を結びつけることができず推測ができなかったが、調査3では、「死ぬまで(必死に)守る」のように解釈された。「死守する」の目的語の「財産を」が追加されたことによる。

以上6つの事例「分乗」「密集」「確約」「散財」「他言」「死守」について、主要部の意味がどのように解釈されているかを見ると、「分乗」「密集」「確約」「散財」「他言」の主要部「乗」「集」「約」「散」

「言」は、調査3の文脈情報が追加されると、複数の意味解釈の中から文脈情報に最も合う1つが選択され、正しい意味推測が可能になっている。(4)「死守」は、主要部「守」の意味は「守る」で変わらず、非主要部の「死」の意味が文脈情報によって適切に解釈された例であると言える。

### 3-1-2. どちらか一方の漢字の意味を利用している事例

漢語動名詞を構成する漢字のうちどちらか一方の意味だけを利用して意味推測を成功させた事例として、「点火」を取り上げる。表4に学習者の回答を示す。

表4 「点火」の回答(調査3提示文「ろうそくに点火する」)

	学習者B	学習者C	学習者D	学習者E
調査2	×	×	×	×
調査3	火をつける。	Light up 火をつける。	火をつける。	火をつける。

調査2では4名全員が推測不可能であった。調査3では全員が正しく推測しているが、それは「点」を無視して「ろうそく」と「火」だけを結びつけて「火をつける」と考えたことによる。「点」が「点<sup>とも</sup>す」という動詞であることは、4名全員が知らなかった。同様の事例には次のようなものがある。

#### (5) 「両立」: 調査3提示文「勉強とアルバイトを両立する」

調査2では6名中5名が推測不可能で、1名が「2つのグループの間に立ち仲介する」と回答している。調査3では、「両」は「勉強とアルバイト」と関連づけられているが、「立」の意味について6名中3名が何も言及せず、1名が調査者からの質問に対して「「私立」の「立」に関係があるかもしれない」と述べたが、それは「両立」の意味には利用されていなかった。

#### (6) 「助長」: 調査3提示文「インターネットが犯罪を助長する」

調査2では「長」を「社長」「課長」のような接尾辞的な意味に解釈しようとしてうまくいかず、調査3では推測に利用できなかった。そのため、「助」を文脈情報と関連づけた意味推測が行われた。「長」には「長ずる(育てる)」という意味があるが、それに言及した学習者はいなかった。1名だけ「長」について「「延長」の「長」と同じ意味ではないか」と言及したが、そのことは「助長」の意味の解釈には影響していなかった。

以上の事例の「点」「立」「長」はいずれも「点火」「両立」「助長」の主要部だが、調査3の意味推測に利用されていない。いずれも、非主要部の「火」「両」「助」を文脈情報と結びつけて意味推測を行っている。これは、「点火」「両立」「助長」における「点」「立」「長」の意味を学習者が知らなかったことが原因である。

### 3-1-3. どちらの漢字の意味も利用していない事例

どちらの漢字の意味も利用していない事例4例のうち3例が「調達」である。表5に「調達」の回答を示す。調査3では、「調」「達」のどちらの意味も利用されておらず、意味推測成功の手がかりは文脈情報だけである。「集める・準備する」という回答は、「留学のための資金を〇〇した」の「〇〇」

に最もあてはまるものとして挙げられたものである。「調達」の主要部は「調」で「ととのえる・準備をする」という意味だが、これも3-1-2の事例同様に正しい意味推測には利用されていない。「調」の意味として「ととのえる」を知っている者はいなかった。

表5 「調達」の回答 (調査3 提示文「留学のための資金を調達した。」)

	学習者B	学習者D	学習者E
調査2	×	調べて終わった。	×
調査3	準備する。(集める。)	(もらった・集めた。)	貯金する。(集める。母語では人に借りても「貯金する」と言う。)

なお、「調達」の意味を「調」「達」のそれぞれの漢字の意味から解釈することは、日本語母語話者にとっても容易ではない。桑原(2013)では、日本語母語話者を対象に、漢字熟語の意味とそれを構成する漢字の意味がどのくらい簡単に結びつけられるか(意味の透明性)を調査しており、それによれば、「調達」の意味の透明性は5段階評定の2.27と低い。このことは、非母語話者である本研究の調査対象者が「調達」どちらの漢字の意味も利用できなかったことの原因を補強するものであると考える。

また、表5の「調達」の事例以外で文脈だけから意味推測を行ったものは、次の「服用」の事例が1例あった。

(7) 「服用」: 調査3 提示文「薬を服用する」

調査2では意味を推測することができず、調査3で「薬を〇〇する」に当てはまるものとして「飲む」と考えた。なお、この事例の調査1では、「服用」について「服をつくるための材料」と推測しており、「用」を「子供用」「女性用」といった接辞的な意味に解釈している。

### 3-2. 意味推測に失敗した事例

次に、調査3で意味推測が失敗した事例について述べる。失敗した学習者の数、すなわち誤答数が多いものから以下に示す。( )内の数字は、調査2で意味推測が成功しなかった事例数である。

誤答数6: 流用(6)

誤答数5: 転売(5) 着手(5)

誤答数4: 断念(5) 下見(6) 死別(6)

誤答数3: 物色(3) 確約(6) 調達(6) 服用(5) 軽減(5)

誤答数2: 白状(4) 注力(5) 成約(3) 白熱(5) 死守(5) 密売(2)

誤答数1: 散財(4) 他言(4) 他界(5) 病欠(3) 助長(5)

たとえば「流用」は調査2で6名全員が意味推測に成功しておらず、調査3でも同様に6名全員が意味推測に失敗している。また、「調達」は調査2で6名全員が意味推測に成功せず、調査3で意味推測に失敗した者は3名である。なお、3-1. で述べたように、調査3で「調達」の意味推測に成功した者は3名であり、意味推測に成功した者と失敗した者は同数になる。

この中から、意味推測に失敗した学習者が多かった「流用」「転売」「着手」の詳細を述べる。表6は「流用」の回答である。調査3の提示文中の「会議費」との関連で、お金に関係する推測が行われているが、いずれも正しいとは言えない。「流用」の意味は「使徒の定まっているものを別の目的に使う」であり、単に「使用する」ことではない。表7は「転売」の回答である。「転売」の意味は「買ったものをそのまま他に売り渡すこと」であり、学習者の回答「売る」だけでは不十分である。「売る」と「転売」の違いを聞いたところ、何らかの回答ができたのは学習者Dだけであった。

表6 「流用」の回答（調査3提示文「会議費を流用する。」）

	学習者A	学習者B	学習者C	学習者D	学習者E	学習者F
調査2	流すこと。	花に水をやる。	×	×	たくさんの方が使用している。	みんなが使っている。
調査3	決済？知らせる？flow	会議費を使う。	使用する。 (お金が流れる=使用)	なしにする。 (「流れる」だから)	払う。	×

表7 「転売」の回答（調査3提示文「マンションを転売してお金をもうけた」）

	学習者B	学習者C	学習者D	学習者E	学習者F
調査2	小さな働ける店。	×	×	売ること。	×
調査3	売る。 (転の意味はわからない)	売る。 (転の意味はわからない)	売る・売れる。 (転は「転げて」。こっちからあつちに、という感じで、「転売」は一人の人を相手に売っている。「売る」は大勢に売っている。)	売ること。(転の意味はわからない。)	×

「流用」「転売」の構造は、左の漢字「流」「転」が主要部「用」「売」を修飾し、どのように使うのか、どのように売ることかという意味を付加している。しかし、「流用」は「流」が担う「別の目的に」という意味が生かされず、「転売」は「転」が担う「別の場所・方向・状態などに変える」という意味を含めることができなかつた。「転売」の「転」と同じ意味で「転」が使われる「転送」を想起した学習者もいなかった。これら2つの例は、主要部の漢字の意味を文脈情報と適切に関連づけられたが、非主要部の漢字の意味を結びつけられず正しい意味推測ができなかつた事例であると言えるだろう。

これと同様の例には「死別」がある。「死別」も「死」が主要部「別」を修飾する構造で、「その人が死んだために永久に別れること」という意味になる。しかし、調査3の回答では、「別」について「別れる」と解釈できても、「死」を「必死」と考える事例があつた。また、「死」を「死ぬ」と解釈できた場合でも、調査3の提示文「彼は両親と死別した」について、死んだのは両親ではなく彼である

と誤った解釈をした事例があった。

ただし、これら「流用」「転売」「死別」については、まったく間違っただけではなく、推測が不可能であったわけでもない。たとえば、次に述べる「着手」とは意味推測の内容の正しさの程度が異なる。この点については4. で考察する。

表8は「着手」である。「着」の解釈が難しく、調査3でも2名がまったく回答できなかった。「着」は主要部であり、「着手」の中心的な意味である「つく・つける 仕事にとりかかる」を担うが、調査の結果からは学習者にとって「つく・つける」よりも「着る」を想起しやすいことがうかがえる。調査1で「着手」の意味を推測した際に、「着」を「着る」と考えた学習者は6名中3名で、調査3で「着く」に言及したのは学習者Dだけである。さらに、「手をつける」という表現を知らなかったことも影響していると考えられる。

また、「慣れてきた」(学習者E)は、提示文中の「仕事」を手がかりに考えたコメントしており、3-1-3「調達」同様、漢字の意味が利用されていない事例であると言えるだろう。

表8 「着手」の回答(調査3提示文「仕事に着手する。」)

	学習者A	学習者B	学習者C	学習者D	学習者E
調査2	入手する。	触る。	×	×	着てみる。
調査3	×	働く。(手を使って働くこと)	×	もらった。(ようやく手に入れた。手に着く、だから。)	慣れてきた。

「着手」のように主要部の漢字の意味が正しく解釈できない例には「断念」があり、「断」について「断つ」ではなく「断る」と考えた事例が見られた。なお、「着手」「断念」の語構成は、どちらも左右の漢字が補足関係<sup>3)</sup>にあり、「手」「念」は主要部「着」「断」の目的語である。

#### 4. 考察

調査3の平均正答数が調査2の約2倍であったこと、調査3の正答事例数が調査2の2倍以上であったことから、漢語動名詞の意味推測に文脈情報を利用できると、漢字の意味情報しか利用できない場合よりも、正しい意味推測が可能になることが確認された。これは推測に利用できる手がかりが増えたことによるもので、Mori & Nagy (1999) と一致する。

文脈情報が追加された調査3で意味推測が成功した事例76例のうち、51例が両方の漢字の意味を組み合わせていることから、漢語動名詞を構成する漢字の意味を知っていたとしてもそれだけでは正しい意味推測が難しく、文脈情報が重要な手がかりになっていることがわかる。また、漢字の意味の組み合わせでは漢語動名詞の意味が推測できない場合に、文脈情報と関連づけられるほうの漢字を重視し、関連づけられない漢字を無視することによって文意を解釈することも可能である。そのようにして正しい意味推測に成功した事例は76例中21例あり、具体的には「点火」「両立」「助長」などが挙げられる。「調達」のように漢字の意味情報を利用せず文脈情報だけから意味推測に成功した事例から

も、文脈情報がそれだけで大きな手がかりとなることは明らかである。

このように意味推測が成功した事例について、文脈情報がどのように利用されているかを詳しく見ると、文脈情報が漢字の持つ複数の意味から適切なものを選択する手がかりとして機能することが示された。文脈情報がない状況ではどの意味を推測に利用すべきか判断できず、文脈情報が追加されることによってその中の1つが適切に選択された事例が複数観察される。たとえば「密集」の「集」について、調査2では「集まる」「集める」の2つの解釈があるが、調査3ではそれが「集まる」に絞られている。さらに、「密」の解釈が文脈情報の追加によって「秘密」から「密度」に変わった。文脈情報がこのように機能するためには、学習者がその漢字の意味を知っており、それが比較的容易に想起できることが前提となる。

意味推測に失敗した事例からも、学習者が漢字の意味を想起できるかどうかことが重要であることが示唆される。文脈情報が追加されても、想起しにくい漢字の意味は利用されないため、漢語動名詞の正しい意味推測は困難になる。たとえば「着手」の「着」の場合、「着る」と「着く」では「着る」のほうが想起しやすく、「断念」の「断」については「断つ」よりも「断る」のほうが想起しやすい。あるいは「点火」の「点」に対する「点す」、「調達」の「調」に対する「調える」のように、未習である可能性が高い意味も存在する。したがって、漢語動名詞の意味推測の成功不成功を考察する場合には、漢字が既習か未習かだけでなく、その漢字のもつ意味のうちどの意味が想起しやすいのかといった視点が必要であると言えるだろう。

次に、漢語動名詞の意味の中心を担う主要部の漢字の意味が、推測にどのように利用されているかについて述べる。本調査の結果からは、文脈情報が活用できる状況下では、正しい意味推測のために、主要部の正しい解釈は必須ではないことがわかる。たとえば、「点火」「両立」「助長」は、非主要部の漢字「火」「両」「助」を文脈情報と結びつけることによって意味推測に成功しており、本来意味の中心を担うはずの主要部の漢字が無視されている。逆に、「転売」「流用」の事例は、主要部の漢字が正しく解釈できても意味推測が成功するとは限らないことを示す。

ただし、主要部の意味が適切にとらえられた場合、意味推測の成功と言うには不十分だが、部分的に成功したとは言える事例がある。「流用」「転売」については、主要部の意味を適切に理解していることが部分的な意味理解につながっている。「会議費を流用する」の意味として、「会議費をなしにする」より「会議費を使う」のほうが正答に近い。「流用する」と「用いる（使う）」は意味的に同じではないが、その意味の一部は理解できていると考えることができるからである。このように主要部を正しく理解していることが漢語動名詞の部分的な意味理解につながるのは、その語構成が修飾関係であることと無関係ではないだろう。「流用する」に対して「どのように使うのかはわからないが「用いる」という意味である」、「転売する」に対して「どのように売るのはわからないが、「売る」という意味である」と言えるように、修飾部分を担う漢字を主要部から切り離して考えることが可能だからである。そして、このように主要部を特定し「用いる」／「売る」という意味である」と判断することができるのは、文脈情報の中に「会議費を」「マンションを」といった目的語が存在し、それとの関連づけができることによる。

それに対して、「着手」「断念」「注力」のように左右の漢字が補足関係にある場合は、目的語を示す

非主要部「手」「念」「力」との組み合わせで主要部「着」「断」「注」の意味を解釈する必要がある。そのため、主要部の意味だけを確定することは難しい。実際、左右の漢字が補足関係の漢語動名詞の中で、主要部の正しい解釈ができたが意味推測ができなかった事例はなかった。ただし、このような語構成のタイプによる意味推測のしやすさの違いは、まだ推測の域を出ないため、事例を増やして確かめる必要がある。

さらに、もう1つの今後の課題は文脈情報の量の精査である。たとえば本研究の「流用」の提示文は「会議費を流用した」だが、もし「会議費を旅費に流用した」のように下線部分が追加されれば、「流」の担う意味を探る手がかりとなったかもしれない。このことは、本研究の文脈情報の量が漢語動名詞によってばらつきがあることとも関係している。たとえば、「会議費を流用した」と「マンションを転売してお金をもうけた」とでは、文脈情報の量に差がある。したがって、文脈情報の量と質の点から、意味推測に成功しなかった漢語動名詞について、どのような情報が追加されれば正しい意味に辿り着くことができるのかについて探る必要があると考えられる。これらの分析を行うことにより、実際にまとまった文章を読む過程で行われる意味推測の様子を分析的に見ることが可能になると考える。

## 注

- 1) 桑原 (2014) で分析対象とした32語のうち、「間食」は調査3の調査用紙に不備があったため除外した。
- 2) 「軽減」の回答のうち1名は正答かどうかの判断ができなかったため除外した。
- 3) 補足関係とは、左右の漢字が「ガ・ヲ・ニなどの格関係によって示される」もので、たとえば「頭痛」「乗車」「入社」などである (秋元, 2005)

## 参考資料

- 『広辞苑 第六版』岩波書店 (2008)
- 『精選版 日本国語大辞典』小学館 (2006)
- 『新漢語林』大修館書店 (2004)
- 『スーパー大辞林3.0』三省堂 (2006-2008)
- 『明鏡国語辞典』大修館書店 (2002)

## 引用文献

- 秋元美晴 (2005) 「漢語の構造」日本語教育学会 (編) 『新版日本語教育事典』 3, 大修館書店, 246-247.
- 桑原陽子 (2012) 「漢字2字熟語の意味推測に及ぼす語構成に関する知識の影響—主要部の位置との関わりから—」『福井大学留学生センター紀要』 7, 1-10.
- 桑原陽子 (2013) 「漢字2字熟語の意味の透明性の調査」『福井大学留学生センター紀要』 8, 1-13.
- 桑原陽子 (2014) 「非漢字系上級日本語学習者による漢語動名詞の意味推測の困難点—「する」の有無

漢語動名詞の意味推測において漢字の意味情報と文脈情報はどのように関連づけられるか

が推測に及ぼす影響—」『福井大学国際センター紀要』1, 1-12.

桑原陽子 (2023) 「漢字熟語の意味推測に利用される漢字の位置情報—ドイツ語を母語とする中上級学習者の事例—」『日本語教育』185, 125-138.

小林英樹 (2004) 『現代日本語漢語動名詞の研究』ひつじ書房.

Mori, Y & Nagy, W. (1999) Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compound, *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

How is the semantic information of Kanji associated with the contextual information in inferring the meaning of Sino-Japanese verbal nouns?

Yoko KUWABARA

This study investigated how advanced-level Japanese learners without a kanji background inferred the meaning of Sino-Japanese verbal nouns and observed how meaning inference differed when they were presented in a sentence and when they are not. The results showed that meaning inferences are more likely to be successful when the Sino-Japanese verbal noun is presented in a sentence. When a kanji in a Sino-Japanese verbal noun has multiple meanings, additional contextual information enables the appropriate meaning to be selected for correct meaning inference. Therefore, the recall of kanji meaning, which can be associated with the context, is necessary for the success of meaning inference. In addition, correctly interpreting the meaning of the head of the Sino-Japanese verbal noun is not the decisive factor for successful semantic inference. Rather, the degree of success in the meaning inference of Sino-Japanese verbal nouns seems to depend on the type of word structure.

Keyword: Sino-Japanese verbal nouns, inference of meaning, information from context, head, non-kanji background advanced-level learner